

歯を食いしばり 闇は明け

どっこい町工場 14

ニッポン 人・脈・記

2008年の秋、100年に一度の経済危機といわれるリーマン・ショックがおきた。つるべ落としのように仕事がなくなる。でも歯を食いしばり、従業員とともに乗り越えた。そんな町工場の経営者が、日本中にたくさんいる。

カツオ、マグロの水揚げで知られる静岡県焼津市。そこで工作機械などをつくる「杉村精工」では09年1月、新たな注文が止まった。

会長の杉村征郎(69)は、40人の従業員をせつたいに守る、と決意した。昇給は我慢してもらったけれど、ほかにできることはないか、と探して当てるのが、政府の助成金だった。カリキュラムを組んでみっちり勉強し、証拠の写真を提出すれば、給与の多くを助けてくれるというのだ。

2月、工場での勉強会がはじまった。毎日、朝8時から夕方5時までみっちり。「まるで専門学校でしな」と。講師は杉村だった。ベテラン従業員だったり。知り合いのコンサルタントなどにも頼んだ。

勉強するのは技術のこと、機械のこと、税金のこと。さらには、こんなことも学んだ。

日本経済分析
新自由主義批判
格差と貧困

「なぜ自分たちが厳しい状況に追い込まれているのかを、学ばせられた。社会に無知ではだめなんです」

杉村の正義感、少年時代に育まれた。

工場をはじめた父は、シベリア抑留者だった。貧しくて、小学生のころは、つぎはきたらけの服を着ていた。だから、あだ名は「東海道五十三次」。

中学2年のころ、家の目と鼻の先に、ビキニ環礁で被曝した第五福竜丸が停泊していた。地元の中学生から、原水爆禁止の署名をあつめる。新藤兼人(98)の映画「第五福竜丸」にも、子役として出演した。「子どもだからって黙ってはいけな

い、と思ったんだね」
杉村は次男。早稲田大の文学部で歴史を学んだ。兄が父と仲たがいでしまい、家業に呼ばれない。ものづくりの経験がないので、私は従業員を頼るしかない。だから、一緒に成長しよ



杉村征郎さん(右)

うと考えてきた」

工場での「専門学校」は昨年5月まで、1年4カ月続いた。そして闇は明け、業績は急回復してぐへ。

名古屋の町工場「エイベック」は、リーマン・ショック前まで、1日に25万個もの自動車部品をつくっていた。またたく間に仕事ができなくなり、従業員150人に不安がよぎる。

08年11月、2代目社長の加藤明彦(64)は宣言した。

「せつたい首切りはしない。人件費にも手をつけない」

大学で経営工学を学び、22歳で家業にはいった。近代経営をしましよ、と自分の考えを従業員に押しつけ、空回りした経験をもつ。「おかげで、中小企業にとって、最大の資源は「ヒ

ト」だ、と気づきました」

首切りはしない、と宣言した加藤は開き直った。

人件費は、銀行から借りりゃいえ。うちがぶれても、銀行さんはつぶれんわ。

経営改善策をまとめたリポートをもつて、銀行にのりこむ。担当者に見せて言った。「うちより経営が厳しい会社を、まずチェックした方がいいですよ」。融資にOKがでた。

09年2月、週休5日に追い込まれる。いよいよのピンチに、加藤は言い聞かせた。

自動車はなくならない、だからうちはずぶれんわ。

営業と技術の担当者がチームをつくり、何かお困りのことは？と大企業をまわった。こんな作れないか、と相談される。すぐに具体的な提案をする。こうして取引先を増やした。いま、売り上げはショック前の9割まで戻っている。



加藤明彦さん

杉村と加藤は、「中小企業家同友会全国協議会」の会員だ。大企業ばかりを大事にする世の中を変えたい、と1989年にできたこの団体は、経営者の理想像をトコトン議論する。4万人余りの会員には、こだわりがある。それは、どんな困難にも負けず、従業員を守りぬく覚悟である。(中略)